

●鶴見川流域ネットワーク宣言●

さつきの風薫る今日、総合治水のイベント“ふれあって鶴見川”当日にあわせて、私たちは鶴見川の全域で流域市民の川まつり“鶴見川ネットワーク・フェスティバル'91”を開始しました。新緑の源流では朝から源流コーヒーマートの湯気があがり、土手にスカンポの咲く中流では賑やかな観察会が開かれました。小ハゼの群れ始めた河口あたりから遥か上流まで辿る人々もたくさんいたことでしょう。鶴見川流域総合治水対策協議会主催の総合治水イベント・ふれあって鶴見川'91のメイン会場となった、ここ横浜市樽町の河川敷にも、早朝から粋な水系市民たちが集い、出店や、綱引きや、たこあげや、そしてカヌーイングをはじめとする各種の催しを楽しみ、交流とアピールの一日を過ごしました。鶴見川ファンの流域市民ネットワークが神奈川・東京の行政の区画さえ越えて文字どおり全流域に広がるのは鶴見川開闢以来はじめてのことと、樽町河川敷アシ原のベンケイガニたちは言っています。

水系全体が都市域に囲まれた典型的な都市河川・鶴見川は、いまなお自然破壊と、洪水の危機、そして激しい汚染の歴史にあります。しかし、総合治水対策の推進や、河川環境管理基本計画の策定で、保全・再生への転機も見えてきました。治水機能一辺倒から親水性、生態系をも考慮した総合的な河川行政への移行や、川辺親水を積極的に活かしたまちづくりは、もはや時代の潮流です。流域市民が再び川への関心を回復し、バクの形をした鶴見川全水系の姿が流域160万の人々の心に鮮明になれば、水系の自然破壊にも歯止めがかかり、水辺の再生創造にも弾みがつく。私たちはすでにそんな時代が始まっていると感じています。

今日スタートしたのは、鶴見川で遊び、鶴見川で学び、さらに水系の世話をやきながらネットワークの輪をひろげようという運動です。流域各地が交流をかさねるうちに、例えば源流の市民の心に河口の町が、河口の町の市民の心に源流の森や泉が住み着くようになる、谷本川の光景が恩田川の市民に、恩田川の光景が早淵川の市民に鮮明に見えるようになるでしょう。私たちは確実に鶴見川水系の地図を共有しはじめ、それが未来への恐らく一番やさしい共通の力になるような気がします。地図の共有は文化の共有に、文化の共有は志の共鳴にいたるものでしょう。もし未来から振り返ることが今できるなら、川にやさしい自然にやさしい新しい流域文化圏を鶴見川流域に育てていこうという大きな志を、私たちが今日ここからはじめたことが見えるかもしれません。

国連人間環境会議20周年の1992年春まで、鶴見川流域は地球的に考え、地域で活動するネットワーク者たちの様々な行事で、河口から源流まで賑わう、この年、235平方キロメートルの水系に暮らす人々と生きものたちが幸いで、ネットワークづくりが楽しく快調である事を祈り、そしてもちろん流域各地で今日の催しを支えた流域仲間の労をねぎらって、静かな拍手、ということにしたいと思います。

1991.5.12

鶴見川流域ネットワーク（TRネット）／流域市民会議参加者一同